

第5次計画（R2～6年度）

茨木っ子プラン ネクスト5.0

一人も見捨てへん教育



もくじ

			ページ	
はじめに		岡田教育長	2～3	
		大阪大学 志水宏吉教授	4	
第1章 課題設定	1 これからの社会を生きるために	Society5.0 を生きる	6	
		ネット接続やスマホの状況	6～7	
	2 これまでのプラン12年の成果と課題	学力向上	8～9	
		体力向上	9	
		豊かな人間性	10	
		茨木型保幼小中連携教育	10	
		学校業務改善	11	
	3 茨木市の子どもたちの状況	支援の必要な児童生徒	12	
		不登校 虐待 暴力行為 いじめ	12～13	
	第2章 茨木っ子プラン ネクスト5.0	1 プランの概要	イメージ図・学力の樹	15～16
茨木っ子力			17～18	
全体図			20～21	
2 プランの取組み		これからの社会を生きる力を育む パスポート・手帳・ネットリテラシー	22～25	
		ともに学びともに育つ教育を進める	26～28	
		確かな言語力を育む	29	
		いじめ・不登校対策を充実させる	30	
		健康体力を増進する	31	
		確かな学力を育成する	32～33	
		ICT 整備と活用を進める	34～35	
		学校の課題対応を支援する	35	
		教職員の資質を向上させる	36	
		豊かな人間性を育む	37	
		人権教育を推進する	38	
		学校業務改善を推進する	39	
		保幼小中連携教育を推進する	40～41	
		地域連携を推進する	42	
		小中学校の取組みを支える人的支援	43	
		巻末資料	第4次 茨木っ子グロウイングアッププラン実施前と最終年度の比較	44



はじめに

茨木市教育委員会
教育長 岡田 祐一

第5次プランでは、「これからの社会を生きる力を育む」「ともに学びともに育つ教育を進める」「いじめ不登校対策の充実」「確かな言語力の育成」の4つを最重点の取組みとしている。

(これからの社会を生きる)

子どもたちが生きていくこれからの社会は、地球温暖化などの環境の変化、AI(人工知能)の普及、急速なグローバル化など変化が激しく予測困難な社会といわれている。まさに令和2年春、新型コロナウイルスの拡大による休校措置や学校再開への対応など、私たちは、これまで経験したことのない状況に対応することを迫られた。このような時には、新たなことを創造する、他者と協同して取り組む、困難にくじけず乗り越えるなど、テストで測ることが出来ない力(非認知能力)が必要とされる。子どもたちは、これから先、多くの経験したことのない状況に対応することになるであろう。そのために、本プランでは、非認知能力(茨木っ子力)の育成を重点の一つとしている。

また、いまの子どもたちの生活は、インターネットやスマートフォンを切り離して考えることができない。たとえ、今持っていないとしても、ほとんどの子どもがいずれ所有することになる。ネットやスマホが子どもたちに与える影響(いい面と課題の両方)は、本当に大きなものとなっている。そのような状況の中では、所持や使用を規則で制限する(他律する)ことよりも、子どもたち自らが適切な付き合い方を考える(自律する)ことの方が重要である。本プランでは、児童会生徒会の子どもたちを中心に、自分たちでネットやスマホ問題について考え行動する取組みや、市PTAと連携した取組みを行う。学校や家庭が連携し、子どもたち一人ひとりにネットやスマホとの付き合い方を自律できる力を育てたいと考えている。

(ともに学びともに育つ教育)

本プランでは、発達や愛着等に課題のある子どもたちへの取組みに重点をおく。本市では、支援学級や通級指導教室に在籍する児童生徒が増加するとともに、通常の学級でも発達や愛着等に課題のある子どもたちが増えている。支援学級への介助員や医療介助員の配置に加え、従来の支援員・サポーターを統合したスクールサポーターを新設拡充し、通常の学級でのきめの細やかな支援を行う。さらに、教職員一人ひとりが、子どもたちの特性や課題に対する理解を深め、支援教育の観点をすべての教育活動の基盤とすることを目指す。それにより、一人ひとりの子どもたちの学力保障や子どもどうしがつながる集団づくりを進めていきたいと考えている。

(いじめ不登校対策の充実)

いじめについては、いじめで苦しむ子どもを見逃さないことが何より重要である。そのためには、教職員一人ひとりが、子どもたちのサインに気づき、早期に対応する取組みを充実させていく。本市の不登校・長期欠席の児童生徒は、全国平均よりやや下回るものの、ここ数年大きく増加している。子どもたちが学校に登校できるよう支援をしていくことに加え、様々な機関と連携し子どもの居場所づくりを進めることも重要であると考えている。そして、すべての子どもたちにとって学校が安心して過ごせる居場所となることを目指し、いじめ・不登校を生まない学校づくりを進めたいと考えている。



(確かな言語力の育成)

本市の全国学力・学習状況調査の結果については、小中学校とも算数・数学に比べ、国語に課題が見られた。また、2019年12月に発表された国際学力調査（PISA調査）の結果でも、日本の15歳の読解力が低下したと指摘されている。本プランでは、リーディングスキルテストの活用をはじめとする言語力向上プロジェクトと外国語教育推進プロジェクトの両面から、子どもたちに確かな言語力を育む取組みを推進したいと考えている。

本編で述べているが、不登校の増加とスマホの普及は関連していると思われる。また、発達や愛着等に課題のある子どもたちが、学校に行きづらくなったり、いじめの加害者や被害者になったりするケースもみられる。そのように4つの最重点の取組みは、それぞれがバラバラなものではない。

非認知能力育成のために取り組む、「茨木っ子キャリアパスポート」や「いま未来手帳」は、子どもたちが自分自身の体験を振り返ることに加え、教員や保護者、地域の方々など周りの大人からコメントをもらうことで対話的にかかわる（つながる）ツールである。

子どもたちが、ネットやスマホに依存してしまうのは、その世界がリアルな体験よりも面白いからである。あるいは、リアルな生活のしんどさから、そこに逃げていることも考えられる。ネットやスマホ対策の目指すところは、リアルな体験を豊かにすること、つまり子どもどうしや大人との関わり（つながり）を充実させていくことである。

さらに、不登校やいじめを生まない居場所づくりについても、物理的な居場所を意味するのではなく、子どもどうしや大人との良好な関係（つながり）を作っていくことである。

そして、言語力の育成についても、言うまでもなく言語は、人と対話する（つながる）ためのものである。

このように本プランは、人と人の対話的なかかわり（つながり）を軸としている。

いままでのプランは3年計画であったが、今回は5年計画とした。しっかり時間をかけて「つながり」を積み重ねたいという思いからである。そのことは、すべての子どもたちの学力向上、そして、社会で自立し生きていく力となると信じている。

本プランは、市教委が、今後5年間の本市学校教育の方向性を小中学校に示す長期的な指導事項としての側面と、市教委が予算を使って実施する事業の集合体を示したものとしての側面を有している。各校では、本プランに込めた思いを共有しながら、市教委が行う事業を有効に活用することで、学校教育の充実につなげていただきたい。

小中学校と市教委が一体となって、「一人も見捨てへん教育」の実現を目指していきたいと思う。



第5次プランのスタートにあたって

大阪大学大学院人間科学研究科

志水 宏吉

「茨木っ子プラン ネクスト5.0」というタイトルの第5次プランが、こうした形で世に出たことをまずは喜びたいと思います。岡田教育長をはじめとする茨木市教育委員会の皆さん、すばらしいお仕事です。そもそも茨木っ子プランは平成20年（2008年）に「学力向上プラン」として立ち上がったのですが、この「ネクスト5.0」は、もはやその域をはるかに超えた「総合教育サポートプラン」の観を呈しています。3年ではなく、5年ものとなっていることも、それを物語るものです。

このプランのサブタイトル「一人も見捨てへん教育」は、平成26年（2014年）に茨木市教育委員会と私のコラボによって出版した本（『「一人も見捨てへん」教育』東洋館出版社）から採られたものです。「一人も見捨てへん」という関西弁は、「決して誰も切り捨てない」という関西の小・中学校教員の「決意」、「職業倫理」を示す言葉です。それがこうしたプランのタイトルに据えられているのは本当に素晴らしいことです。教育委員会の強い意思がそこに感じられます。

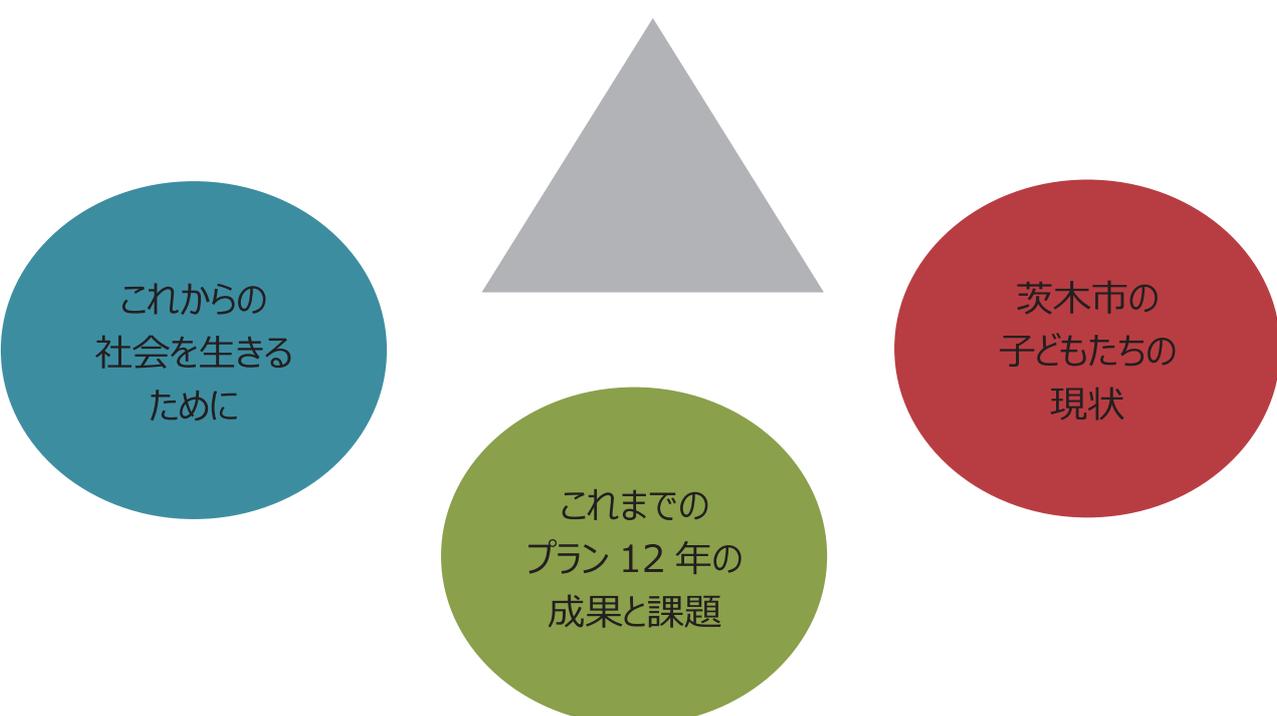
ただし、この段階で私は、あえて一つの危惧を指摘しておきたいと思います。それは、子どもたちの教育のあり方をシステムティックに整えようとすればするほど、その中身が形式化・形骸化しやすいということです。いろいろなものを周到に取り込もうとすればするほど、施策が総花的なものになり、「一人も見捨てない」という最も大切な精神が忘れ去られがちになってしまう危険性もあると感じるのです。

当初の茨木っ子プランのフォーカスは明確なものでした。「学力低位層を減らす」こと。施策の焦点・対象は明確であり、現場の力は結集され、10頁に示されているような顕著な結果が数値データにも表れてきました。しかしながら、今日の社会情勢や子どもたちが育つ生活環境のありようと考えると、かつてのようなシャープなアプローチがそのまま結果に結びつくと期待するのは、少し難しいかもしれません。総合的なアプローチを施さなければ、学力の問題のみならず、不登校やいじめといった諸課題に対応することはできないのも事実です。ただ、私はそのことが、根本の精神を忘れることにつながってはいけなさと強く思うのです。

茨木の子どもたちの教育に携わるすべての皆さんにお願いしたいのは、一人ひとりの子ども、とりわけしんどい立場・状況に置かれている子どもたちへの温かなまなざしと丁寧なかかわりを決して忘れてないいただきたいということです。市町村レベルでこれだけ精緻に体系化されたプランをもつ自治体は、それほど多くありません。この優れたプランを「絵に描いた餅」としないよう、関係者一人ひとりの自覚が強く求められているように思います。

第1章

課題設定



これからの
社会を生きる
ために

これまでの
プラン12年の
成果と課題

茨木市の
子どもたちの
現状

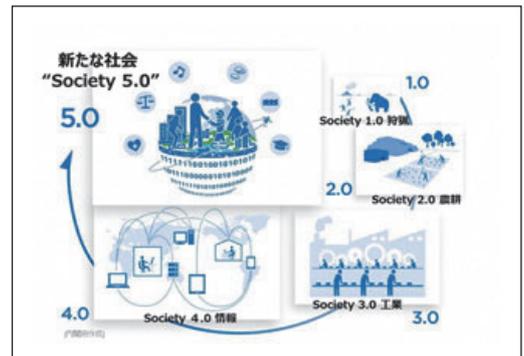
1

これからの社会を生きるために

Society5.0 を生きる

子どもたちは、AI（人工知能）やIoTの進歩、グローバル化など変化の大きな社会(Society5.0)を生きることになります。そのためには、パソコン等のICT機器を操作できる力とともに、インターネットやSNS上の虚実のまざった情報を安全に活用するためのネットリテラシーの力が必要になってきます。

合わせて、新しい価値を創造する、多様な他者とつながり協働するなど、AIにはできないこと、人間ならではの能力が必要になってきます。



子どもたちのネット接続の状況

兵庫県立大学竹内和雄准教授は、平成30年度に大阪府内の小中学生・高校生約17,000名にスマートフォン(スマホ)に関するアンケート調査を行いました。

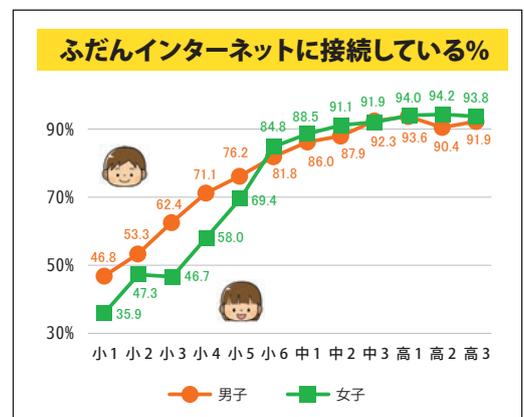
それによると、男子は、小1から小5にかけて、ゲーム機を通じてネット接続する割合が高く、低学年でも半数近くがインターネット接続しています。一方、女子は、男子より早い段階からスマホに触れており、小6になると、ネット接続している率が男子を上回ります。小6以上になると、男女ともスマホが主な接続機器となり、80%以上の子どもが、ネットに接続しています。

これらのアンケート結果から、子どものスマホやゲーム機によるネット接続は低年齢化していることと、大部分の子どもが何らかの方法でネットに接続していることが分かります。

子どもたちに、自己コントロール力が十分に育たないまま、長時間のネット接続が習慣化してしまっている状況が見られます。

それにより、ネット依存に陥ったり、SNS上でのトラブルやネット犯罪に巻き込まれたりしてしまう危険性が大きくなっています。

一番ネット接続する機器	
男子	女子
小1 スマホ・ゲーム機	小1 スマホ
小2 ゲーム機	小2 パソコン
小3 ゲーム機	小3 パソコン
小4 ゲーム機	小4 スマホ
小5 ゲーム機	小5 スマホ
小6 スマホ	小6 スマホ
中1 スマホ	中1 スマホ
中2 スマホ	中2 スマホ
中3 スマホ	中3 スマホ
高1 スマホ	高1 スマホ
高2 スマホ	高2 スマホ
高3 スマホ	高3 スマホ

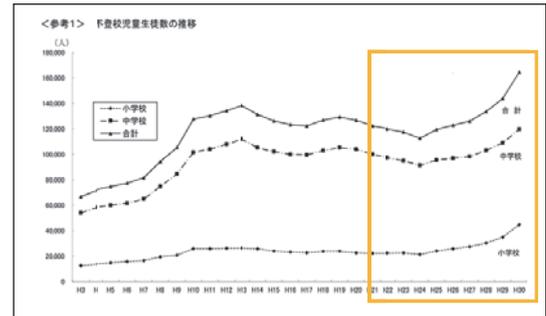
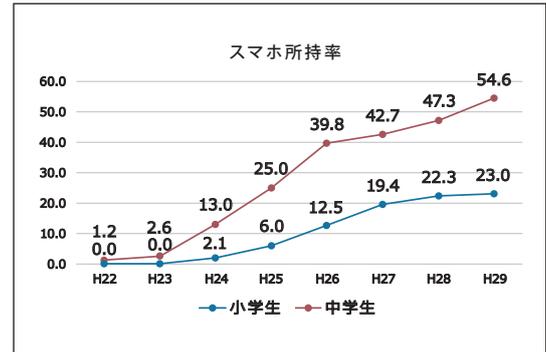


スマホ所持率と不登校

全国のデータでみると、小中学生のスマホの所持率の上昇と不登校児童生徒数の増加は、同じような形をしています。子どもたちが、スマホやネットゲームに依存することで学校に行かなくなったり、あるいは、学校に行きづらい子どもが、スマホやネットゲームが居場所となりますますます登校できなくなっていたりする状況があるのではないかと考えられます。

本市においても、小中学校の不登校児童生徒数は、このところ増加傾向にあります。（詳細は後述）

スマホやネットゲームへの依存に対する対策は、不登校の未然防止には重要だと考えます。また、それは、いじめ対策や学力保障にもつながるものと考えます。



茨木っ子プラン ネクスト5.0 では

変化が激しく予測困難な社会を生きていく子どもたちに、「AI や情報を使いこなし、ネットやスマホとうまく付き合う力」と、「新しい価値を創造する、多様な他者とながら協働するなど、人間ならではの能力」を育むことを目指します。

2

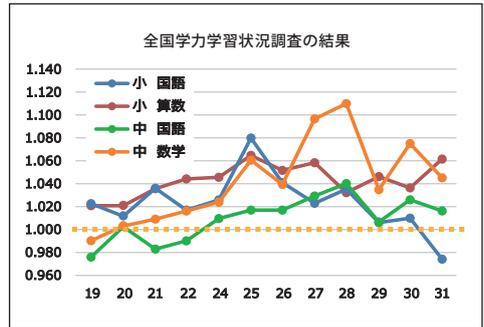
これまでのプラン12年の成果と課題

学力向上

①全国学力調査

平均正答率については、平成19～31年度の12年の調査において、小学校が横ばい、中学校が右肩上がりの傾向となりました。

教科別では、小中学校とも算数・数学は良好な状況ですが、国語に課題が見られました。平成31（令和1）年度は、漢字を文の中で正しく使う力や、話し手の意図を捉えながら聞き、自分の考えをまとめる力について全国平均と比べ、課題がみられました。

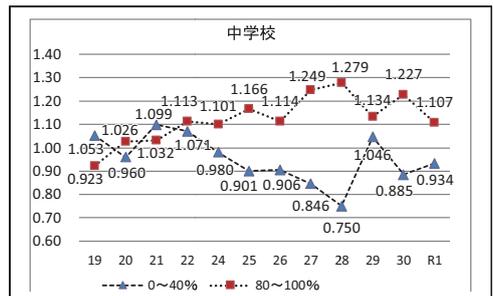
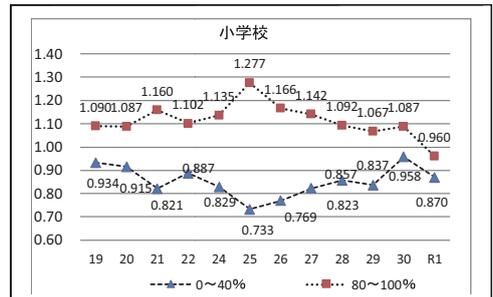


②正答率の高い子どもと低い子どもの割合

学力高位層（正答率80以上）と低位層(40%以下)

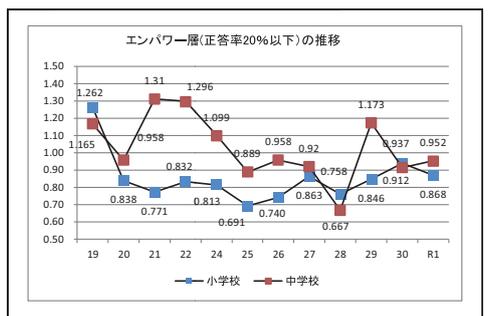
全国学力調査で正答率80%以上の子どもたちを学力高位層、正答率40%以下の子どもたちを学力低位層としています。

小学校では、低位層の子どもが平成19～31年度まで全国平均を下回る結果となり、良好な結果でした。高位層については、平成31年度は課題が見られる結果となりました。また、中学校では、低位層の子どもの割合が平成29年度は全国平均を上回ったものの、平成30・31年度は全国平均を下回り、良好な結果となりました。



エンパワー層(正答率20%以下)

学力低位層の中で、さらに正答率20%以下の子どもたちをエンパワー層としており、「一人も見捨てへん教育」で大切にしてきた指標です。小学校では、平成19年度以降は全国平均1を下回る状況が続けることができています。中学校では、平成19・21・22・29年度と全国より多い年度がありますが、全体的に減少傾向となっています。

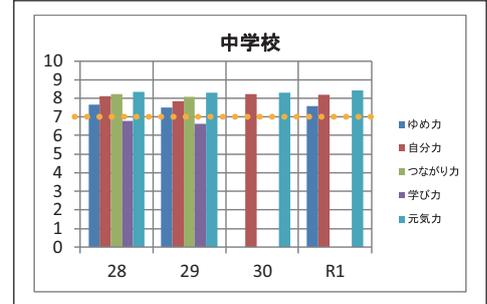
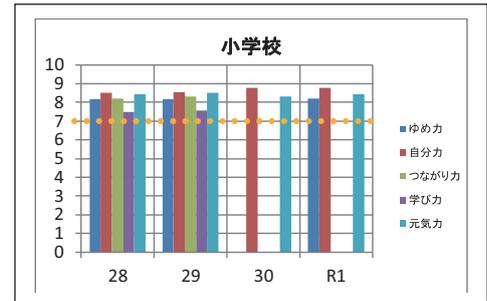


上のグラフはいずれも全国平均を1としてその比で表しています

③子どもたちに育みたい5つの力

5つの力については、茨木っ子グローイングアッププランでは「7.0を上回ることを目標としていました。（児童生徒が、該当のアンケート質問項目にいずれも肯定的に答えた場合7.0となるため）

小学校では、全ての年度の全ての項目について、目標を達成しました。中学校で、は平成28・29年度の学び力が目標に達しませんでした、それ以外は、全てで目標値を達成しました。（全国学力・学習状況調査の調査項目が変更になったため、平成30年度2項目、令和1年度は3項目しか測定できませんでした。）

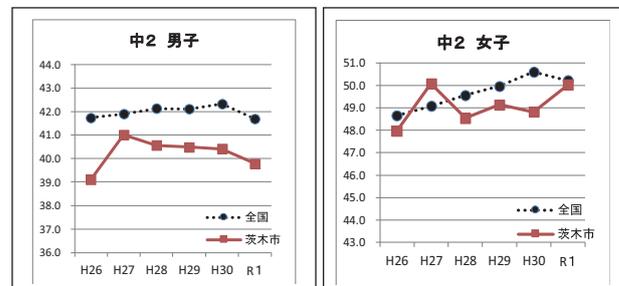
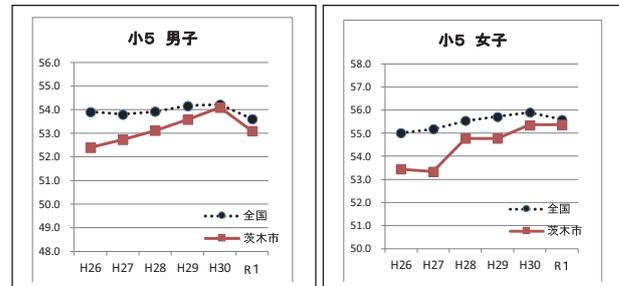


体力向上

① 全国体力調査（体力合計点）

スポーツテストの各種目の合計である体力合計点については、5年前の平成26年度は、小5・中2の男子女子とも、全国平均を大きく下回っていました。

これまでの体力向上プロジェクトの取組みにより、小5男子女子・中2女子は、ほぼ全国平均と同程度にまで向上しました。しかしながら、中2男子については、平成27年度より下降傾向を示しており、課題が残る結果となりました。

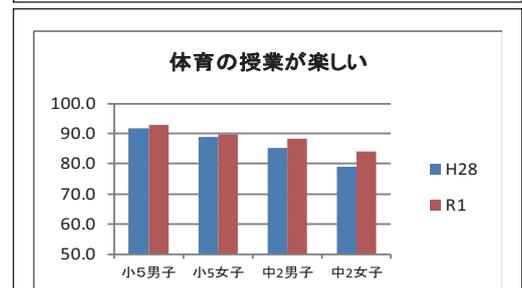
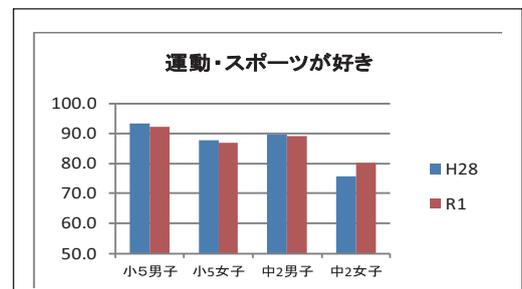


②運動についての意識

「運動やスポーツが好き」と回答する割合については、平成28年度と令和1年度を比べると、中2女子のみが向上し、小5男子女子と中2男子は低下しました。

一方、「体育の授業が楽しい」と回答する割合については、平成28年度と令和1年度を比べると、小5男子女子と中2男子女子とも向上しました。そのことは、これまでの小中学校の体育の授業改善の成果だと考えます。

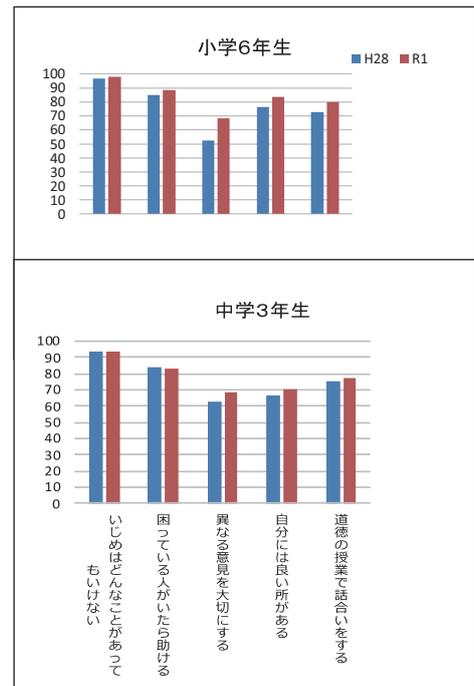
それらのことから、学校の体育授業だけではなく、外遊びの減少やゲームやスマホの普及など子どもたちの生活面の影響が出ているのではと考えます。



豊かな人間性（道徳・人権教育）

平成28年度と令和1年度を比べると、「いじめはどんなことがあってもいけない」「困っている人がいたら助ける」「異なる意見を大切にする」「自分には良い所がある」の4つの項目について、小学6年生・中学3年生とも全ての項目で肯定的に回答する割合が増加しています。

これは、小中学校における「道徳の授業で話し合いをする」などの道徳の授業充実や人権教育の推進の成果であると考えます。



茨木型保幼小中連携教育

茨木型保幼小中連携教育は、平成26年度から取り組んでいます。茨木っ子グローイングアッププランの3年間では、右の6項目の取組みを通して、各中学校ブロックの自立を目指してきました。

各ブロックでは、連携コーディネーターが中心となって、学びのシンポジウムとして合同授業研を公開したり、連携カリキュラムの活用や新しいカリキュラムを追加したりなど、各中学校ブロックの保幼小中連携をさらに進めることができました。

しかし、3年後の達成目標としてきた各中学校ブロックの『自立』という点では、十分とは言えず、3年後の目指す姿として設定した3点について、全ての中学校ブロックが達成できたわけではありません。これまでの取組みを継続しながら、さらに充実させることが必要となっています。

また、本市では、小学校に入学してくる子どもたちは、公立以外の保育園・幼稚園等からも多く入学しており、今後、私立保育園・幼稚園等との連携を進めることが必要となっています。

茨木っ子グローイングアッププランでの保幼小中連携

取組み

- ① 中学校ブロックで合同授業研を年1回以上行う
- ② 中学校ブロックで定期的に担当者会を行う
- ③ 連携教員がブロックの校園所で授業を行う
- ④ 小中連携の意識を高め、実践につなげる
- ⑤ 教職員や子どもたちの交流をより充実させる
- ⑥ 保幼小中連携カリキュラムを活用し、何のために連携をするのか、子どもたちにどんな力を育むのか、教職員の意識を高める

達成目標

各中学校ブロックの自立(目指す姿)

- ① 中学校ブロックで連携組織をつくり、定期的に各種担当者会を行う
- ② 連携カリキュラムを活用した取組みを各中学校ブロックで実施する
- ③ 中学校ブロックの保幼小中連携に全教職員がかかわっていることを実感できる

学校業務改善（教職員の働き方改革）

茨木っ子グローイングアッププランでは、学校業務改善は、1つの取組みで成果が出るものではなく、様々な取組みを行うことで成果が出るものと考え、多くの新規事業に取組みました。

この3年間に「業務サポーター」や「部活動指導員」などの人的支援、「全校一斉退校日」や「部活動の在り方に関する方針」などのルール設定、「出退勤管理システム」や「校務支援システム」などのシステム導入等に取り組みました。

令和1年度と平成30年度の月別時間外労働時間を比較すると、月によって差はありますが、平均すると、小学校では58分、中学校では3時間8分減少しました。

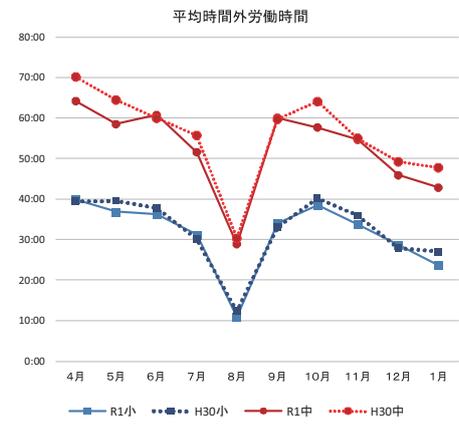
また、教職員対象のアンケートで「子どもと向き合う時間が十分取れている」という項目については、小学校・中学校ともに、肯定的回答の割合が増加しました。グローイングアッププランにおける学校業務改善の目的は、「教員が子どもと向き合う時間の確保と教育活動の充実」としていましたので、目的の達成に向けた取組みが進んだものと考えます。

しかし、時間外労働時間は減少したといっても、依然教職員の時間外労働が多い状況に変わりはありません。今後も継続して、学校業務改善（教職員の働き方改革）に取り組む必要があります。

取組み	実施年度
業務改善推進委員会の設置	H29～
業務サポーターの配置	H29～
業務改善サポートチーム	H29～
全校一斉退校日の設定	H29～
市教委主催会議の精選・集約	H29～
出退勤管理システムの導入	H30～
メッセージ電話の設置	H30～
校務支援システムの導入	R1～
学校閉校日の実施	R1～
中学校部活動休養日の設定	H29～
部活動の在り方に関する方針の策定	R1～
部活動指導員の配置	R1～

ひと月時間外労働時間（R1とH30の比較）

	H30	R1	比較
小学校	32時間 19分	31時間 21分	58分減
中学校	55時間 38分	52時間 30分	3時間 08分減



子どもと向き合う時間が十分取れている

	H28	H29	H30	R1
小学校	38.1%	49.5%	63.2%	67.3%
中学校	40.9%	44.3%	59.9%	60.4%

茨木っ子プラン ネクスト5.0 では

これまでの取組みの結果、課題として残った「国語力（言語力）の向上」や「教職員の長時間労働の解消」、全ての取組みを貫く「茨木型保幼小中連携教育」を重点的に取り組みます。また、学力向上や体力向上、豊かな心の育成についても引き続き取り組んでいきます

3

茨木市の子どもたちの
状況

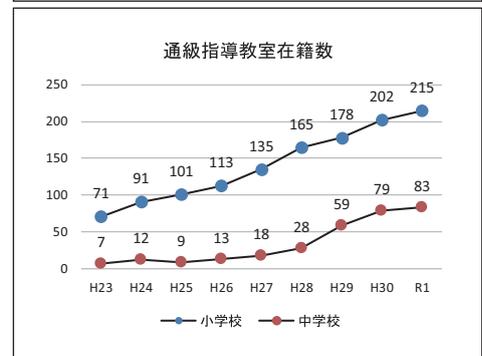
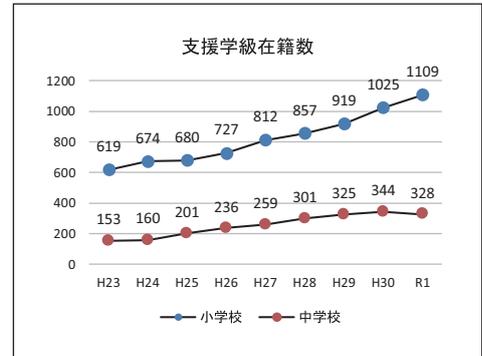
個別の支援の必要な児童生徒の増加

本市小中学校の支援学級に在籍する児童生徒数は、ここ数年増加し、8年前の2倍程度になっています。

また、通級指導教室に通う児童生徒数は、8年前の4倍程度になっています。

さらに、通常の学級に在籍し、発達等に課題があるため、個別の指導計画を作成している児童生徒は975人（令和1年度）となっています。

このように、支援学級や通級指導教室在籍、通常の学級在籍にかかわらず、個別の支援を必要とする児童生徒は年々増加しています。

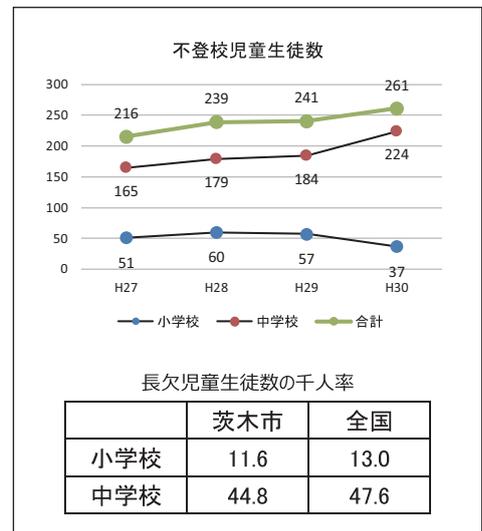


不登校・長期欠席児童生徒の増加

本市小中学校における、不登校児童生徒数(年間30日以上欠席)は、ここ数年で増加しています。

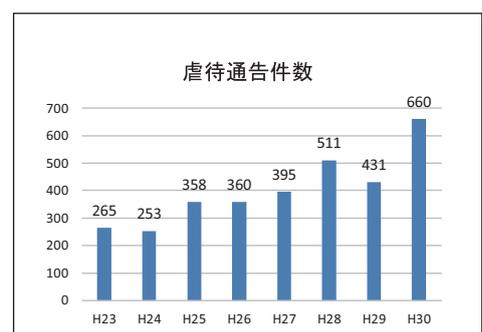
また、長欠児童生徒数の千人率の統計では、小学校では11.6人、中学校では44.8人と、全国平均よりやや下回るものの、ほぼ全国と同じ状況です。

不登校・長欠児童生徒の増加に対する対応が、大きな課題となっています。



児童虐待の件数の増加

児童虐待の件数は660件あり、平成30年度は23年度の約2.5倍となっています。学校やSC、SSWなどの専門家、関係機関等との連携が、虐待通告数の増加に繋がっている面もありますが、発見しやすい立場にある教職員が、児童虐待に対する認識を深めていく必要があります。

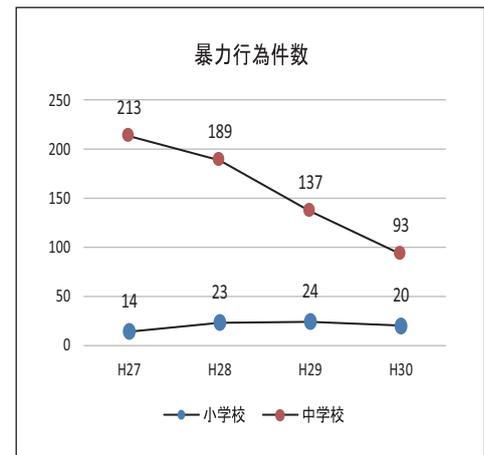


暴力行為の減少

小中学校の暴力行為等は、小学校ではほぼ横ばいですが、中学校ではピーク時の約半分に減少しています。

特に中学校での生徒指導体制の確立による組織対応や、専門家（SC・SSW）、警察やサポートセンターと連携し、「予防的指導」や「成長を促す指導」を行ってきた結果、暴力行為は減少してきました。

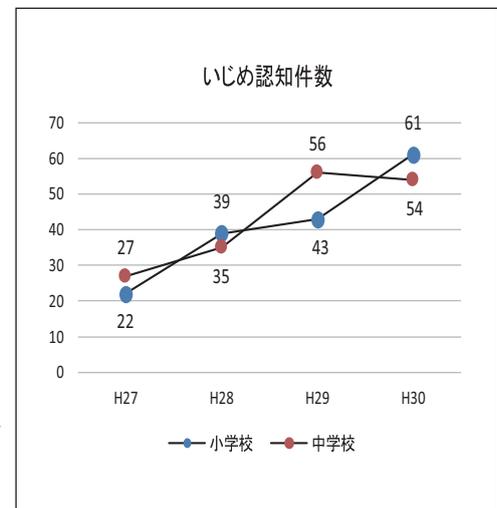
ただし、暴力行為には至らないSNSにまつわるトラブルや児童生徒のコミュニケーション不足からのトラブルは増加しており、新たな課題に対する対応が必要となっています。



いじめの積極的認知

本市小中学校では、いじめで苦しむ子どもを見逃さないため、いじめの認知件数を増やし、いじめをできるだけ早期に認知し解消につなげる取組みを進めています。その結果、平成27年度の小学校22件、中学校27件と比べ、平成30年度では小学校で61件（2.7倍）、中学校では54件（2.0倍）と認知件数が上昇しています。また、いじめの解消率については、平成30年度小学校100%、中学校94%となっています。

各小中学校では、学校いじめ防止基本方針を策定し、いじめ対策組織の設置、アンケートや教育相談による早期発見、マニュアルの作成、いじめの定義の理解、子どもの理解、いじめ対策推進法やいじめ重大事態の調査に関するガイドラインに則った対応など、教職員のいじめに対する正確な認知の推進と、組織的な対応が今後とも必要となっています。



茨木っ子プラン ネクスト5.0では

個別の支援が必要な児童生徒が増加している中、そのような子どもが、学校に行きづらくなったり、いじめの加害者や被害者になったりしてしまうケースがあるのではないかと考えています。

不登校やいじめを生まないだけでなく、学力保障の面からも、一人ひとりの教職員が、障がい、発達課題、愛着課題等への理解を深め、特性や背景を踏まえた指導の充実に取り組んでいきます。



SDGsと一人も見捨てへん教育

持続可能な開発目標 (SDGs) は、誰一人取り残さない (leave no one behind) ことを誓っている。
そして、SDGsが定めている17の国際目標の中の1つ、教育の目標は、「質の高い教育をみんなに」である。
これは、本市が掲げている「一人も見捨てへん教育」と大きく重なっている。

本市の小中学校には、様々な子どもたちが通っている。
コツコツ努力できる子。すぐあきらめてしまう子。
勉強が好きな子。嫌いな子。
運動が得意な子。苦手な子。
友だちとすぐに仲良くなれる子。なかなか友だちを作れない子。
こだわりの強い子。落ち着きがない子。パニックになってしまう子。
家庭で安心して過ごせる子。家庭の中でも安心できない子。
「みんな」とは、そういった子どもたちである。

登校してきた時にイライラしていた子どもは、もしかしたら家庭で何かあったのかもしれない。
宿題を忘れた子どもは、やる気はあってもやり方が分からなかったのかもしれない。
教室を飛び出した子どもは、教室の環境に混乱して苦しくなったのかもしれない。
友だちに手を出してしまった子どもは、自分のこだわりを邪魔されたのかもしれない。
子どもたちの表面的な言動のみを指導するのではなく、子どもたちの言動の背景や要因を理解して、あるいは
思いを馳せ、関わり、支援し、指導する。
「質の高い教育」を「みんな」に行うとはそういったことだと思う。

しかし、それらは簡単なことではない。
子どもの言動によって心が動揺させられることもある。時には、腹立たしくさえ感じる時もある。
他の子どもたちに迷惑をかけてしまうこともある。
また、わがままを許すと周りの子どもたちに影響するとも考えてしまう。

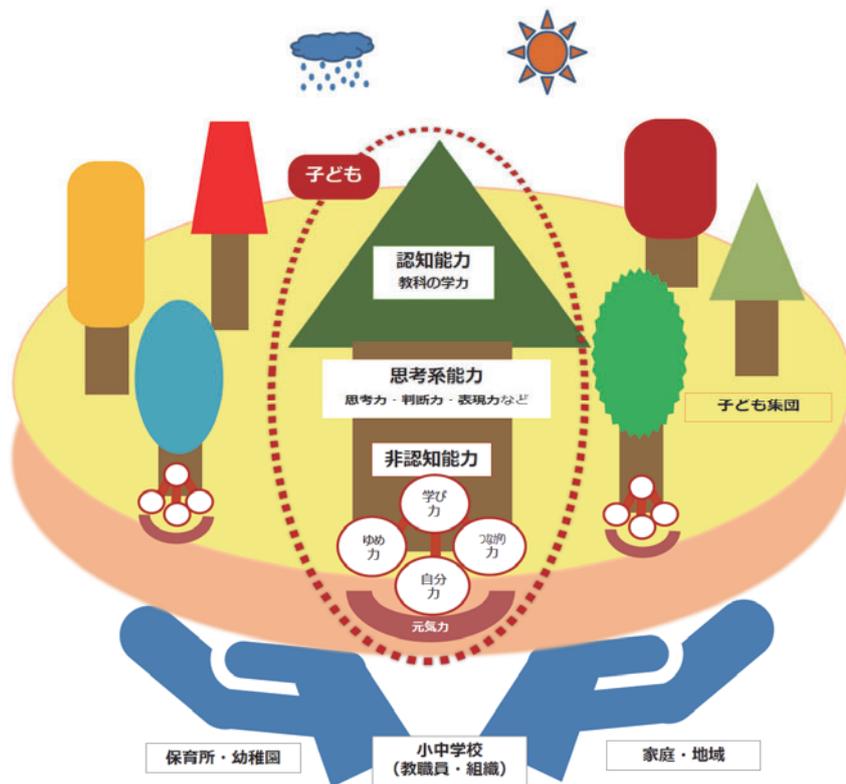
しかし、私たちは、子どもに関わる専門職である。
子ども理解に基づいた教育に粘り強く取り組みたい。
そのことが、本市が大切にしている「一人も見捨てへん教育」だと考えている。

(加)

SDGsとは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された、2030年までの持続可能でより良い社会を目指す国際目標。17のゴール・169のターゲットから構成され、誰一人取り残さない (leave no one behind) ことを誓っている。

第2章

茨木っ子プラン ネクスト5.0の取組み



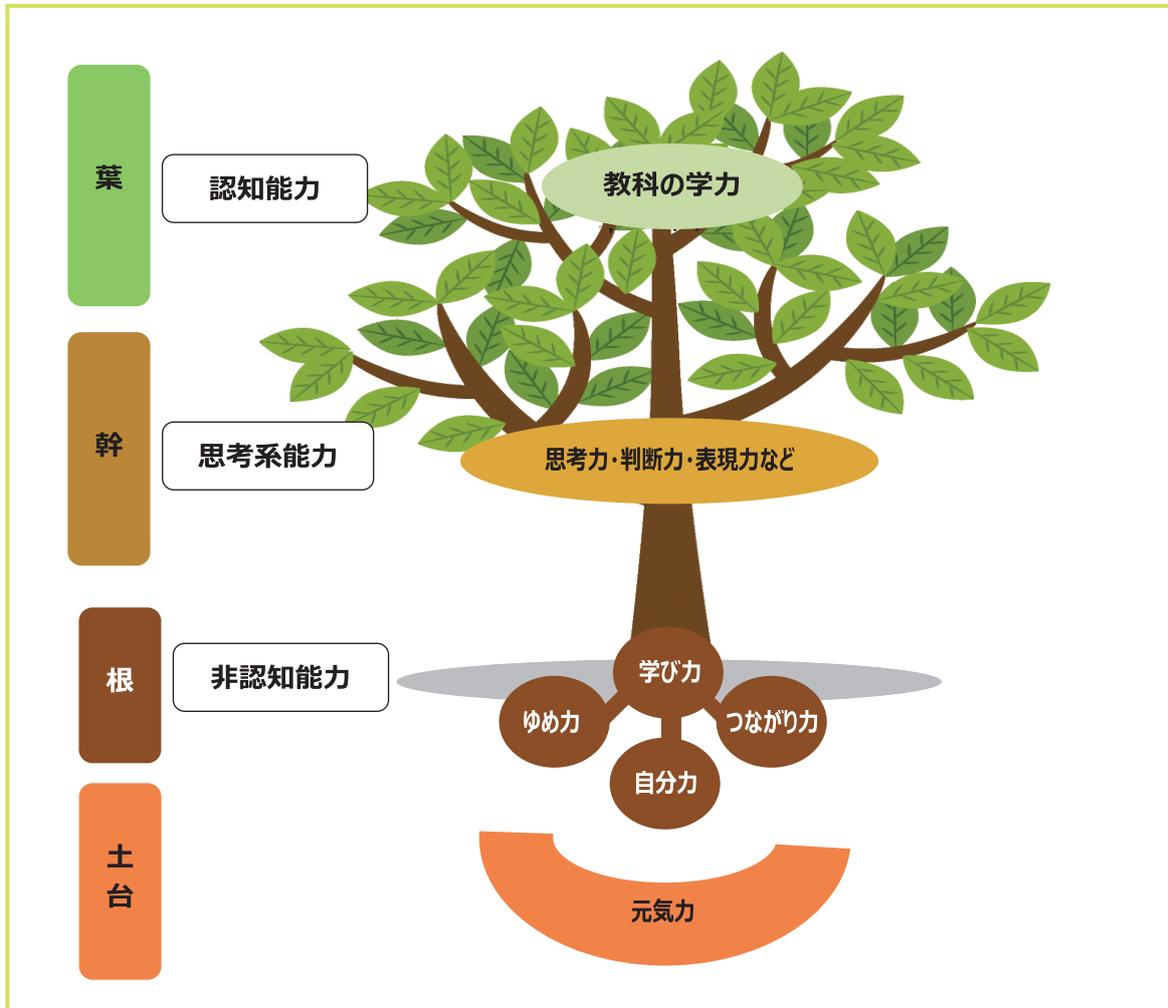
イメージ図

自然界では、樹木は、地球温暖化などの環境の変化に適応していく必要があります。また、樹木の健やかな成長のためには、種類や成長段階に応じた丁寧な手入れ(支援)が必要です。そして、豊かな土壌では樹木は成長しますが、土壌が痩せてしまうと、樹木はそこに居場所がなくなります。

イメージ図では、社会の激しい社会（society5.0 など）や、虐待・貧困など子どもを取り巻く厳しい状況を「環境の変化」。支援が必要な子どもやつまづきやすい子どもなど多様な子どもの状況を「いろいろな大きさ・形・色の樹木」。子どもたちへのきめの細かい支援を「手入れ」。いじめや不登校を生まない人間関係と一人ひとりが安心できる居場所を「豊かな土壌」に例えています。

学力の樹

これまでの考え方を引き継ぎながら、これからの社会を生きる子どもたちに必要な能力の視点で、整理しました。



葉は、「教科の学力」を表すもので、勉強などを通じて獲得し、いわゆるペーパーテストで測ることができます。そのため、認知能力といいます。

一方、根は「ゆめ力」「自分力」「つながり力」「学び力」などを表します。そして、根の土台として「元気力」を位置付けています。木の根は、通常、土の上からは見ることができません。同じように、学力の樹の根は、ペーパーテストで測ることができないもの（＝非認知能力）です。根や土台は、いわば内に秘めたもの全てであり、その子の良さや個性です。

その葉と根をつなぐのが幹です。幹はこの場合、思考力や判断力、表現力などの思考系能力で、人と関わる中で身に付ける、自分なりの考えです。

学力向上のために必要なことは、葉と根の両方に十分な栄養をやり、幹を太くして、木全体を成長させること。そして木の成長とは、子どもたちの豊かな人間性・社会性の成長にほかならないと考えます。



茨木っ子力

非認知能力とは、数値等で測ることができる学力や目に見えて「できる・できない」が分かる技術や技能ではなく、数値化できない、表面上では見てとることができない人間の内面的な能力のことをいいます。

茨木市では、これまでも「子どもに育みたい4つの力」として「ゆめ力」「自分力」「つながり力」「学び力」の育成を進めてきました。茨木っ子プラン ネクスト 5.0 では、これまでの「4つの力」を、これから何が起るか予測しにくい社会の中で、子どもたちが自分らしく生きていくため必要な力という視点で捉えなおし、保育所・幼稚園・小学校・中学校の教職員と協議を重ね、「茨木っ子力（本市の子どもに育みたい非認知能力）」に改訂しました。

知識やできることを増やすだけではなく、定義にあるような「未来に向かって、努力する」「自分と向き合い、高める」「他者を思いやり、つながる」「興味関心を広げ、意欲的に学ぶ」といった力が、子どもたち自身が直面する課題や困難を乗り越え、自己実現を果たしていく上で必要不可欠であると考えます。

小中学校・家庭・地域の方々が協力して、本市の子どもたちに「茨木っ子力」を育むよう取り組んでいきます。

名称	定義	目指す姿
ゆめ力	未来に向かって、努力できる力	夢や目標を持つことができる（目標設定）
		夢や目標に向けて挑戦することができる(チャレンジ)
		あきらめず最後まで取り組むことができる（継続・レジリエンス）
自分力	自分と向き合い、高める力	自分のことを肯定的にとらえることができる（自尊心・自己有用感）
		自分の感情をコントロールすることができる（自己抑制）
		自分の考えや判断に自信を持つことができる(自信)
つながり力	他者を思いやり、つながる力	他者と協力して取り組むことができる(協力)
		他者の意見や考えを受け入れることができる(リスペクト)
		自分の考えや気持ちを他者に伝えることができる(コミュニケーション)
学び力	興味関心を広げ、意欲的に学ぶ力	様々なことに興味関心を持つことができる(興味関心)
		疑問や不思議に感じたことを解決するために行動することができる(課題解決)
		学びや経験を新しい考えや行動につなげることができる（振り返り力）

茨木っ子力を検討していただいた先生方（所属はR1年度のもの）

	所属	氏名
保育所	春日保育所	大久保 彩
	郡保育所	鈴木 早苗
幼稚園	北幼稚園	梨田 えりか
	西幼稚園	寺田 恵
	水尾幼稚園	徳岡 智映
小学校	春日小学校	安本 直哉
	玉島小学校	辻本 佳那
	耳原小学校	池原 史明
中学校	東中学校	津本 航佑
	三島中学校	中川 翔伍
	太田中学校	齊藤 友那



茨木っ子カ ループリック

茨木っ子カのループリック（評価基準を観点と到達段階からまとめた表）を作成しました。教職員や保護者、周りの大人が、子どもたちの様子や活動を見取る際の目安として活用していきます。

ただ、「ステップ1ができればステップ2になる」とか「3年生ではステップ2、だから4年生ではステップ3になる」というものではありません。その時々や活動内容や子どもの気持ちによって、到達は変わるもの。また、低学年でステップ4になったり、中学生であってもステップ1になったりする場合もあるものと考えています。

大切なのは、長い目で見たときに、螺旋階段のように、一人ひとりの子どもたちの到達度が少しずつステップアップすることだと考えています。

茨木っ子カ ループリック

ゆめ力			
定義	未来に向かって、努力できる力		
目指す姿	夢や目標をもつことができる (目標設定)	夢や目標に向けて挑戦することができる (チャレンジ)	あきらめず最後まで取り組むことができる (継続・レジリエンス)
ステップ4	夢や目標を実現するためにやるべきことが分かっている	実際に課題を解決する中で夢や目標に近づくことができている	途中で失敗や困難が多くても最後まで取り組みむことができている
ステップ3	具体的な夢や目標を持つことができている	夢や目標に向けてより具体的な課題に挑戦できている	途中で失敗や困難が少なければ最後まで取り組むことができている
ステップ2	抽象的ではあるが、夢や目標を持つことができている	夢や目標を意識した特定の課題に挑戦できている	途中であきらめたとしても、一定期間持続して取り組むことはできている
ステップ1	夢や目標を持つことに意味があることを理解できている	夢や目標のためには挑戦しなければ始まらないことを理解できている	夢や目標のためにあきらめないことが大切だと理解できている
育むために	ゆめ力を高めるために、自分らしい夢や目標を持つことの大切さを伝えたり、結果ではなく、がんばっている姿や行動を認めてあげることが大切です。		

自分力			
定義	自分と向き合い、高める力		
目指す姿	自分のことを肯定的にとらえることができる (自尊心・自己有用感)	自分の感情をコントロールすることができる (自己抑制)	自分の考えや判断に自信を持つことができる (自信)
ステップ4	人の役に立っている自分のことを肯定することができる	場面に応じて感情のコントロールができている	自信を持って、場面に応じた考えや判断ができている
ステップ3	自分がやってきたことを具体的に肯定することができる	いろんな場面で感情のコントロールができている	いろんな場面で自分の考えを持ち、判断ができている
ステップ2	自分自身を全体的に肯定することができる	感情が動きやすい特定の場面で感情のコントロールができている	考えや判断ができやすい特定の場面で自分の考えを持ち、判断ができている
ステップ1	自分自身を否定しないことができている	自分の感情の動きを自覚することができる	人の考えに頼りながら自分の考えを持ち、判断ができている
育むために	自分力を高めるために、子どもに行動の振り返りをさせたり、子どものことを大切にしているというメッセージを伝えることが大切です。		

つながり力			
定義	他者を思いやり、つながる力		
目指す姿	他者と協力して取り組むことができる (協力)	他者の意見や考えを受け入れることができる (リスペクト)	自分の考えや気持ちを他者に伝えることができる (コミュニケーション)
ステップ4	一緒に取り組む中で、お互いの強みを生かし弱みを補うことができている	自分と他者の意見や考えの違いからより良いものを生み出すことができている	自分の考えや気持ちを他者に配慮しながら伝えることができている
ステップ3	一緒に取り組む中で、お互いに思いや意見をやりとりし合うことができている	他者の意見や考えを受け入れることができている	自分の考えや気持ちを他者がわかるように伝えることができている
ステップ2	各自の思いが優先されているが、一緒に取り組むことができている	他者の意見を聞いて、違いがあることを理解できている	自分の考えや気持ちを一方的に伝えることができている
ステップ1	一緒に取り組んではいないが、単独で取り組むことはできている	他者の意見を受け入れないが、自分の意見を伝えることができている	伝えるまではいかないが、自分の考えや気持ちを持つことができている
育むために	つながり力を高めるために、他者と協働して取り組む場面を設定し、友だちと力を合わせている様子を認めてあげることが大切です。		

学び力			
定義	興味関心を広げ、意欲的に学ぶ力		
目指す姿	様々なことに興味関心を持つことができる (興味・関心)	疑問や不思議に感じたことを解決するために行動することができる (課題解決)	学びや経験を新しい考えや行動につなげることができる (振り返り力)
ステップ4	興味関心を持った物事についてさらに探求することができる	問題解決のために適した手段を取り、解決することができる	学びや経験から新しいことへ発展・創造することができる
ステップ3	もっと様々なことに興味関心を広げることができる	疑問や不思議に感じたことを解決するために行動することができる	学びや経験を新しい考えや行動につなげることができる
ステップ2	自分の好きなことから興味関心を広げることができる	出会った様々なことに疑問や不思議を感じる事ができている	振り返りによって学んだことや経験したことを言葉にできている
ステップ1	自分の好きなことには興味関心を持つことができる	目の前のことに疑問や不思議を感じる事ができている	体験したことを振り返ることができる
育むために	学び力を高めるために、子どもの興味関心につながるような場を設定し、課題に取り組んだり、自分を振り返っている様子を認めてあげることが大切です。		

★ 4つの力のステップ下段には、「育むために」として、子どもたちが非認知能力を高めていくために、大人側が大切にしていきたい内容を示しています。



これからの時代に必要不可欠な「茨木っ子力」

岡山大学

中山 芳一

私たちは、古くからテストで数値化できる力（認知能力）だけでなく、非認知能力が大切であることは感じ取っていた。だから、これまでも家庭や幼稚園・保育所、学校、地域などで大人は子どもにそのことを伝えてきたはずである。

しかしながら、いつしか非認知能力は、ぼんやりとした感覚的なものとなってしまう、はっきりとしたテストの点数の方が重視されるようになってしまった。ところが、時代は超加速度的に変化し、必ず見つかる正解ではなく、修正しながら見出していく最適解こそが求められ始めている。現在の新型コロナ問題は、まさにこのことを象徴しているかのようである。

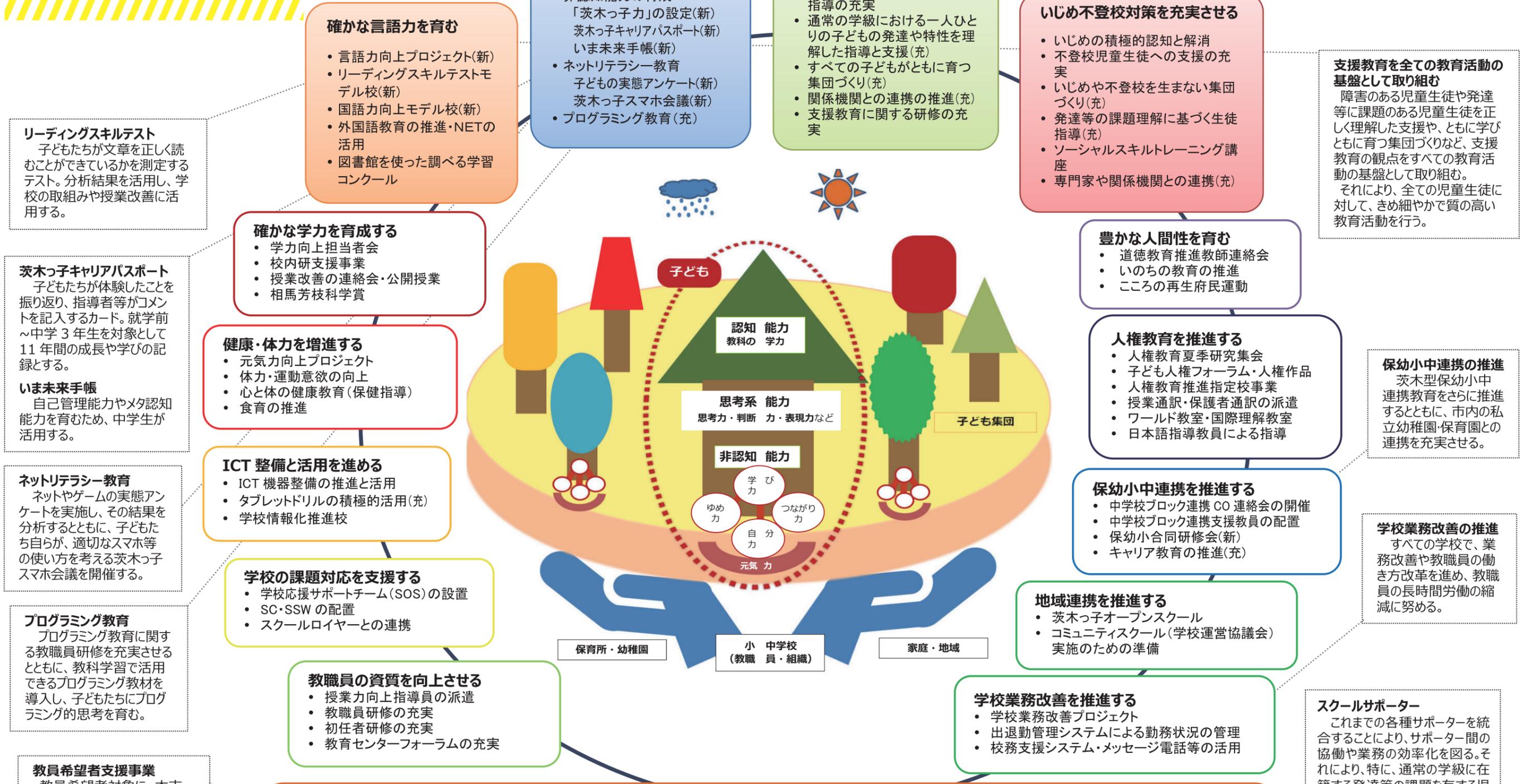
それでは、修正しながら最適解を見出していくためには、何が必要なのだろうか？ 「茨木っ子力」が掲げるように、未来へ向かって努力を惜しまず、自分と向き合いながら自分を高め続け、他者への思いやりを持って他者とつながり、興味関心を広げながら意欲的に学んでいかなければ、修正することも最適解を見出していくことも不可能だといえるだろう。

非認知能力は、点数化できず見えない力ゆえに、取ってはっきり意識することは難しい。それでいて、これからの時代にますます必要不可欠な力となってきた。そのような中、茨木市では10年以上も前から非認知能力を「学力の樹」へ位置付けることで、言語化し、明確に意識化してきたのである。言語化すれば個々人が意識し、他者とも共有できる。第1次茨木っ子プランから蓄積してきたこの成果を、ネクスト5.0によって大いに結実させられる…そんな期待を抱かずにはいられない。

茨木っ子プラン ネクスト5.0

一人も見捨てへん教育

重点の取り組み



リーディングスキルテスト
子どもたちが文章を正しく読むことができているかを測定するテスト。分析結果を活用し、学校の取り組みや授業改善に活用する。

茨木っ子キャリアパスポート
子どもたちが体験したことを振り返り、指導者等がコメントを記入するカード。就学前～中学3年生を対象として11年間の成長や学びの記録とする。

いま未来手帳
自己管理能力やメタ認知能力を育むため、中学生が活用する。

ネットリテラシー教育
ネットやゲームの実態アンケートを実施し、その結果を分析するとともに、子どもたち自らが、適切なスマホ等の使い方を考える茨木っ子スマホ会議を開催する。

プログラミング教育
プログラミング教育に関する教職員研修を充実させるとともに、教科学習で活用できるプログラミング教材を導入し、子どもたちにプログラミング的思考を育む。

教員希望者支援事業
教員希望者対象に、本市独自で研修等を実施することで、本市での任用を希望する講師を確保し、講師不足の解消を図る。

確かな言語力を育む

- 言語力向上プロジェクト(新)
- リーディングスキルテストモデル校(新)
- 国語力向上モデル校(新)
- 外国語教育の推進・NETの活用
- 図書館を使った調べる学習コンクール

これからの社会を生きる力を育む

- 非認知能力の育成
「茨木っ子力」の設定(新)
茨木っ子キャリアパスポート(新)
いま未来手帳(新)
- ネットリテラシー教育
子どもの実態アンケート(新)
茨木っ子スマホ会議(新)
- プログラミング教育(充)

ともに学びともに育つ教育を進める

- 支援学級・通級指導教室での指導の充実
- 通常の学級における一人ひとりの子どもの発達や特性を理解した指導と支援(充)
- すべての子どもがともに育つ集団づくり(充)
- 関係機関との連携の推進(充)
- 支援教育に関する研修の充実

いじめ不登校対策を充実させる

- いじめの積極的認知と解消
- 不登校児童生徒への支援の充実
- いじめや不登校を生まない集団づくり(充)
- 発達等の課題理解に基づく生徒指導(充)
- ソーシャルスキルトレーニング講座
- 専門家や関係機関との連携(充)

支援教育を全ての教育活動の基盤として取り組む
障害のある児童生徒や発達等に課題のある児童生徒を正しく理解した支援や、ともに学びともに育つ集団づくりなど、支援教育の観点から全ての教育活動の基盤として取り組む。それにより、全ての児童生徒に対して、きめ細やかで質の高い教育活動を行う。

確かな学力を育成する

- 学力向上担当者会
- 校内研支援事業
- 授業改善の連絡会・公開授業
- 相馬芳枝科学賞

健康・体力を増進する

- 元気力向上プロジェクト
- 体力・運動意欲の向上
- 心と体の健康教育(保健指導)
- 食育の推進

ICT整備と活用を進める

- ICT機器整備の推進と活用
- タブレットドリルの積極的活用(充)
- 学校情報化推進校

学校の課題対応を支援する

- 学校応援サポートチーム(SOS)の設置
- SC・SSWの配置
- スクールロイヤーとの連携

教職員の資質を向上させる

- 授業力向上指導員の派遣
- 教職員研修の充実
- 初任者研修の充実
- 教育センターフォーラムの充実

豊かな人間性を育む

- 道徳教育推進教師連絡会
- いのちの教育の推進
- こころの再生府民運動

人権教育を推進する

- 人権教育夏季研究会
- 子ども人権フォーラム・人権作品
- 人権教育推進指定校事業
- 授業通訳・保護者通訳の派遣
- ワールド教室・国際理解教室
- 日本語指導教員による指導

保幼小中連携の推進
茨木型保幼小中連携教育をさらに推進するとともに、市内の私立幼稚園・保育園との連携を充実させる。

保幼小中連携を推進する

- 中学校ブロック連携CO連絡会の開催
- 中学校ブロック連携支援教員の配置
- 保幼小合同研修会(新)
- キャリア教育の推進(充)

学校業務改善の推進
すべての学校で、業務改善や教職員の働き方改革を進め、教職員の長時間労働の削減に努める。

地域連携を推進する

- 茨木っ子オープンスクール
- コミュニティスクール(学校運営協議会)実施のための準備

学校業務改善を推進する

- 学校業務改善プロジェクト
- 出退勤管理システムによる勤務状況の管理
- 校務支援システム・メッセージ電話等の活用

スクールサポーター
これまでの各種サポーターを統合することにより、サポーター間の協働や業務の効率化を図る。それにより、特に、通常の学級に在籍する発達等の課題を有する児童生徒へのきめ細かな支援を充実させる。

小中学校の取り組みを支える人的支援

講師配置	課題対応	部活動	授業力向上	進路保障	学校業務改善	支援教育	学習支援・子ども支援・図書館支援
●教員希望者支援事業(新)	●スクールカウンセラー ●スクールソーシャルワーカー ●SC・SSWアドバイザー ●スクールロイヤー ●いじめ対策指導員	●部活動指導員 ●部活動外部指導者	●授業力向上指導員	●奨学金活用相談員	●業務サポーター	●介助員 ●医療介助員 ●合理的配慮指導員 ●巡回相談員	●スクールサポーター(新) ●学習支援者 ●不登校支援員(ふれあいフレンド・チャトルスタッフ)